

近世の街道と庶民文化

こかいどう しゅくば 五街道の宿場

徳川家康は伝馬^{でんま}の制度を定め、各宿場に公用で使用するための人足^{にんそく}と馬を用意することを命じました。神奈川県には東海道に9つ、甲州道中に4つの宿場が置かれました。

宿場には公用の荷物を送るための問屋場^{といやば・とんやば}や、大名、幕府の役人が泊まるための本陣^{ほんじん}や脇本陣^{わきほんじん}、一般の人が泊まる旅籠^{はたご}や木賃宿^{きちんやど}がありました。人が集まる宿場には、禁止事項^{きんじじこう}や決まり事を記して掲げた高札場^{こうさつば}もありました。

多摩川^{たまがわ}、馬入川^{ばにゅうがわ}、酒匂川^{さかわがわ}など大きな川は、通常は橋が架けられることはなく、舟や人足による渡しが行われていました。

また、箱根には「入鉄砲に出女^{いりてっぽうに出おんな}」の言葉で知られる関所^{せきしょ}が置かれました。関所には刺又^{さすまた}、突棒^{つくぼう}、袖搦^{そでがらみ}と呼ばれる三つ道具と呼ばれる武器^{ぶき}が常備^{じょうび}されていました。

1833（天保4）年ころ、初代歌川広重^{うたがわひろしげ}は「東海道五十三次」の浮世絵版画^{うきよえはんが}を出版します。当時、庶民の旅が一般的になっていたこともあり、爆発的な人気を博しました。

神奈川の県域でも、江の島^{おおやま}や大山参り^{おおやままい}、鎌倉^{かまくら}や金沢八景^{かなざわはっけい}などの名所旧跡めぐりが人気となっていました。これらの人気観光地を描いた名所絵図^{なごころえず}や浮世絵の名所絵^{うきよえ}がたくさんつくられました。



高札



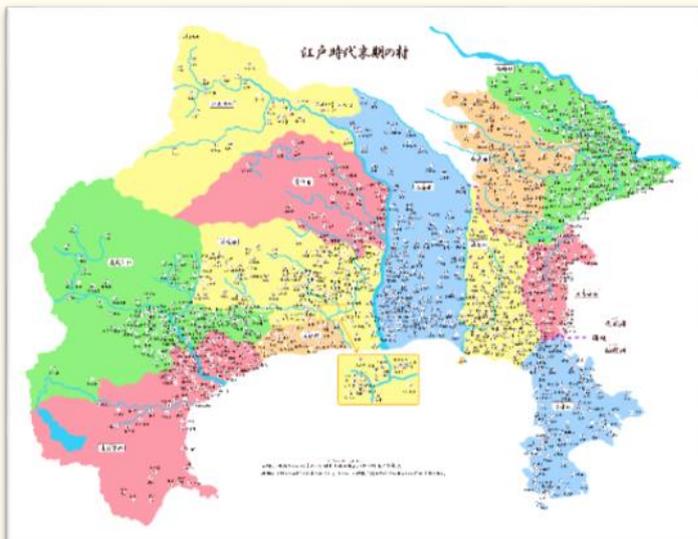
幕府や藩は法律や命令を人々に伝えるため、村や宿場の中心部に高札を掲げました。江戸時代を通してさまざまなものが出されましたが、村では、放火犯の密告を奨励する札、徒党・強訴・逃散を禁ずる札、キリスト教禁止と隠れキリシタンの密告を勧める札の3枚が基本でした。

江戸時代の旅道具

江戸時代も文化・文政期（1804～1830年）ころになると、伊勢参りなどの庶民の旅が盛んになります。旅に出るときは持ち物をできるだけ少なくし、持ち運びに便利のように工夫していました。



江戸時代の村



江戸時代、領主は村を通じて年貢を集めました。村は名主、組頭、百姓代の村役人により運営されました。村役人の下で農民は五人組に組織され、たがいに助け合うとともに、年貢の納入や犯罪の防止に連帯責任を負わされました。

神奈川県域は小田原に譜代大名の大久保氏を置き、他の大部分は天領（幕府の直轄領）や旗本領などでした。これは、他の多くの国で大名が支配する領地の割合が高いことから比べると特徴的です。